
もしも剣の世界が鉄とオイルの世界なら <SAOif ACシリーズ>

ネジが飛んだ旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも剣の世界が鉄とオイルの世界なら <SAOif ACシリーズ>

【Nコード】

N4673X

【作者名】

ネジが飛んだ旅人

【あらすじ】

ハイスピードロボットバトルゲーム、その金字塔とも言うても過言ではないゲームタイトル アーマード・コア。難易度は全てのゲームの中でも折り紙付きで、そんな（難しすぎて）クソゲーとまで叫ばれてしまうゲームが、とある世界では一大ブームとなっていた。ある日、そんなアーマード・コアがデスゲームになってしまった。ベースはSAOに、添加物はACシリーズ。幾度の（ロボゲー）戦争をこえて不敗。ただの一度も敗走は無く、（変態）紳士にしか理

解されない。彼らは常に独り、硝煙の漂う丘で勝利に酔う。故にこのあらすじに意味は無く、この小説は、きつとフロム脳で出来ていた。

SS 投稿掲示板にも同じ物を投稿しております。

一話

日本人という奴は実に機械：というよりロボットが好きだ。統計をとれば実に5人に4人は『ロボットが大好きだ！』と言うだろう。

かく言う俺も、二脚の持つあの魅力に惚れ込んだ、いつでも過言ではない。とにかくヒロイックな印象に魅了され、とらわれたものだ。

そして、俺の目の前には、ある種日本人（あえて言うがこういうのが好きなもの）全員の夢を叶えるべく用意された機体が目の前に鎮座している。

ただし、その代償は、俺たちの、命。完全なる、デスゲーム。悪夢のタイトルという奴だろう。

このゲームの名前は、アーマード・コア・オンライン。無限の蒼穹に浮かび、鉄と火薬の匂いが充満する。それが、この世界のすべてだ。

「……………これが…流石だな」

ナーヴギアで全身の感覚をこの世界に委ねている俺は、思わずそう呟いた。

世界を見渡し、ほう、とため息を吐く。

荒れきった空は灰色にくすみ、水平線に落ちかけた黄金色の太陽によってやや明るく照らされていた。建物はいずれも日本の基準では廃墟にされていても不思議でないほどに外壁が崩れ落ちていたり、弾痕が生々しく残っている。

視界に入るすべての物がリアルに見えた。そう。リアルではない（・・・・・・）。この世界は『ナーヴギア』というく仮想現実>に入るためのハードから伝えられる情報を、俺の脳が入ってきたそれを変換して、網膜に写しているように見える世界だ。実際の世界では俺の体は家のベッドに横たわっていることだろう。

「……………つと、取り敢えずまずはガレージか、レイヴンスネストに登録しにいかないとな」

ともかく現実の世界の事は一旦置いておこう。まずはこの世界の事をよく理解するべきだ。

説明書には世界観の説明と操作の仕方程式しか書かれていなかった。流星はチュートリアルを作らない企業を作るだけはある。

そしてこの世界では基本的にプレイヤー達は傭兵となって金を稼いで、グランドクエストをクリアして世界を広げる。

まず、どうやって金を稼ぐか、だが、簡単なことだ。NP Cによって用意されたミッションを受領して、それをクリアすれば自分のストレージに金が振り込まれる。

それで豪遊するのもアリだし、もっと高い報酬を貰うために機体を強化するのもいいだろう。

ちなみに個人的には後者をオススメしたい。

グランドクエストに関してだが、これはNPCのAIの強い機体を相手にするか、巨大な兵器の破壊ミッションかどちらかだ。後者は制限は無いのでかなり強い機体になっているが、数で押せば何とかなるだろう。

「……今考察をしてる場合じゃないな。さて…ガレージに行って見ますか」

首を回してあちこちを見回しながらステータス欄を開き、MAPを表示、それでレンタルガレージの位置を確認してそちらの方向へ向かっていく。

閑話として初期機体には候補があり、各企業やグループごとに機体を設定している。

前のシリーズまでのすべての企業が復刻しており、例えばムラクモ・ミレニウムやミラージユなどが例に挙げられる。

俺がその中から選んだのは、レイレナード製、アリーヤ。カラーリングも自分で設定出来るので黒にしておいた。

ともかく流線型のそのフォルムは全体的に細く、機体性能といい中量機というよりはどちらかといえば軽量機というカテゴリが当てはまるだろう。

特徴は”コア”と呼ばれる人間の胸部に当たる部分で、前方に鋭く尖っていて、後方もまるでレーシングカーの羽(?)のようになっている、全体的に鋭角的で早そうな仕上がりになっている。

ともあれ観光もすぐに終わり、俺の目の前には巨大な倉庫が現れる。少しだけ、といっても人間が数人が余裕で並んで通るこ

との出来るくらい開いた鉄扉の上には飾り気の無い看板が無個性にその存在を主張していた。

「……レンタルガレージ”迷い人”か、なんだかなあ……」

どう考えても4系が色濃い。操作システムがハンドルレスなAMSとか、世界観の設定的には完全な新作だったりするんだけど……。

しかしまあそこは考えていても仕方ないだろう。鉄の扉をくぐり抜けカウンターに寄りかかる。

「……いらっしやい、何か用か？」

やや粗暴そうな目つきの悪い青年が、カウンターの奥から手についた大量のオイルをエプロンで拭いながら現れた。こいつがこここの店主だ。

「ああ、『Kirrito』のガレージを頼む」

「……身分証明、ステータス出しやいいから」

「こつでいいか？」

これもテストの通りだ。左手をふいっと横に振ってステータスを出す。

「……キーだ」

確認したらしい店主は、取り出したキーを俺に向かって投げる。受け取った瞬間にはすでに奥の部屋に引っ込んでいた。

それにしても世渡り上手には見えない、なぜあんなに無愛想な奴が1kmほどにも及ぶガレージを管理しているんだろうか。

テストではあいつはかつての首輪つきだとかの噂が飛び交っていたが。…十中八九気のせいだろう。

ともかく思考に耽っている間に俺のガレージに着いていたらしく、扉に銘打たれていた『kirrito』の文字が目端に入った。

パスワードを打ち込み、キーを差し込む。でかい扉が両方に開かれて行った。無論演出なのだろうが、その迫力に俺は思わず息を飲んだ。

「……………これが、俺の機体……」

そこには黒の巨人が鎮座していた。なにか他の武器を買っていけばそこら中にあるハンガーなどに追加されるのだが、今は初期なので何もない。

起動時に黄色く光る複眼は、今は消えた状態で真っ直ぐに俺を見つめている。

「……………」

本当ならば直ぐにでも起動したいところなのだが残念ながらレイヴズネストの許可が無いと起動したらシステムに罰金を搾り取られてしまう。しょっぱなから資金を失したくない。

じゃあなぜ最初にここ来たんだよ。という質問には待ちに待ったゲームを説明書を読まずにハードにぶち込むときの心理を想像してほしい。アレだ。

仕方なく扉を閉めて、出口でキーを返して、レイヴンズネストの看板が立つ、向かいの大きな建物に入る。中は予想通りに人が多く、やや驚いた。

受付も人でごった返しており、しばらくはかかるだろう。

人待ちの文字が表示される端末から待ち番号の書かれた紙片を受け取り、待合席の長いベンチの開いていた席に座る。

すると、隣に座る赤髪の好青年が申し訳なさそうに俺に話しかけてきた。

「なあ、ここってどういうところなんだ？」

「……え？知らないのか？」

「ああ、ただ目の前に テスターっぽいのが居てそいつについて来ただけだ」

成程、理に敵っている。オンラインゲームでなにか分からないことがあれば友人に聞くか他人に聞く、もしくは知ってる奴の事を見て真似すればいい。

ただ、まあ当てずっぽうはいただけないが。俺はてっきりステータスのクエスト欄確認してここに居るか テスターだと思っていたからな。

ちなみにこのことをこいつに話すと、「おお！マジだ！気づかぬーよこんなの！」と驚いていた。

まあ最初はガレージで罰金搾り取られる奴が多かったからな、システムの穴があるに違いないと苦情を言った結果、企業から帰ってきたのは「ステータスのクエスト欄にて登録の手順が確認できます」という返答。正直言ってあの時は拍子抜けした。

「ありがとな！えっと……」

「キリトだ」

「おう、ありがとな、キリト。俺はクラインだ、宜しく」

「ああ、宜しく、クライン」

少し騒がしい気もするがなかなかいい性格の青年だ。人付き合いも良く、インしている友人も割と多いらしい。

「って、俺待ち番号の紙受け取ってねえわ…、ちょっと待っててくれ、キリト」

「ああ、別に俺もだいぶ待たなきゃいけないしな、構わな
い」

直ぐにクラインは席に戻り、各々番号が呼ばれるまで他愛もない話をして待っていた。

例えばクラインは『フルダイブ』はこのゲームが初めてだとか、グラフィックの素晴らしさだとか。

話を初めてしばらくすると、俺の番号が呼ばれる。

「じゃ、クライン、この登録が終わったらテストモードで開線開いて待ってるから」

「おう、このゲーム自体初めてだからな、レクチャー頼む
ぜ？」

「ははっ分かってるって」

登録といつてもステータスを書き写して同意書にサインをするだけなので直ぐに終わった。

実に簡素なもので、最後に、「あなたはこの世界を生き残る覚悟がお有りですか？」と問われたのが気にはなっただが、まあ追加の台詞が何かだろう。

ともかく登録を終わらせたからには正直言っしまえばもはや暫くここには用は無い。

俺は先ほどのクラインとの約束を果たすためにこの建物の向かいのガレージ”迷い人”に向かう。……立ち去る際に感じた、言いようもない不安を無理やり払拭して。

「うおっ……ととと……のあぁっ！危ねっ！」

奇妙な掛け声に合わせて動くローゼンタール製ネクスト『ランシール』はそれはもうフラフラで見えていらなかった。

左腕に装備された盾のような形状の物体の先端から出た、レイピアのようなレーザーブレードが慌てたように動く両腕に連動してブンブンと宙を焼く。

「ははは……、先ずは動きになれないとな、と言っても普通に自分が思った通りに動くはずだから取り敢えず頭の中で自分を直立させてみるよ」

「とつとつと……ふいー……つってもなあ……」

バランスを何とかとったランシールはやけにコミカルな動きで額を拭うモーションをする。

「そうそう、そんな感じだよ。やれば出来るじゃないか」

「え？……おお！こんな感じか！成程……これはハマるな

…」

ランシールは両腕を目の前に持ってきて握ったり開いたりを繰り返し、終いにはどたどたとそこら辺を走り出す。

「ときにキリ公、お前はどうかやって飛んでるんだ？」

「え？」

そう、クラインの言う通り、俺は空に浮かんでいた。原理としてはメインブースターの推力を安定させてふわふわと浮いているだけだが、クラインはどうにも理解できないようだ。

ちなみにこれに関してはただ単に空を飛ぶという感覚だけで普通にいける。

「ああ、まず自分が空に浮かんでるって頭の中で想像してみてくれ」

「へ？む、む、む……どうか？」

そういうランシールは前方にすーっと移動しているだけだった、割とありがちな事なので笑うに止まる。

かく言う俺もすべての動作を覚えるまでに一週間はかかった。

「ははは、違うよクライン。それじゃ前進してるだけだ」

「むう……む、む、ううむ、うおー!？」

暫くランシールの中で唸っていたクラインはどうかやらいメー
ージを掴んだらしく、その場でぐるぐる回るのを止め、フラフラと
だが上昇していく。

「こ、こっか?」

「そうそう、なかなか飲み込みが早いな」

「へへっ、まあな」

クラインは自慢げにランシールの胸を張らせて、地面に落
下する。集中が途切れると割とこっぴどいことになりがちだ。

ちなみに落ちるとものすごく痛い。足が。オートブースト
という機能もあるのだが、基本的に切られたままの上、設定するの
が面倒くさいためにほとんどの機体がそのままの設定でオートブー
ストは使っていない。

案の定クラインは例に漏れなかったらしく。

「……っおお……ってえ……」

「大丈夫か?クライン」

俺はブースターの推力を落としながらクラインの隣に降り
立つ。悶絶したクラインはランシールのつま先を握りながらうずく
まっていた。

暫くすると頭部を俺に向けて涙声になって「華麗だな畜生！」と言ってくる。

その様子にひとしきり笑うと、再度声をかける

「で??どうする?もうちょっとやるか?」

「おう!……と、言いたい所だが、五時半にピザを頼んでるんでな、悪いがこれでログアウトさせてもらうぜ」

「準備万端だな……」

「恐れ入ったか」

「いや全然、その後はどうするつもりなんだ?」

自慢げに先ほどやったように胸を張るランシールをあっさりとした返答で切り捨ててその後の予定を聞いてみる。

「ん、俺はその後最初の広場で他のゲームでの知り合いと落ち合うつもりだ、どうだ?紹介すっからあいつらとフレ登録しねえ?メッセージもいつでも飛ばせて便利だし」

「あ…うーん」

このクラインとは自然に付き合えてはいるが、その友人達とも同様に仲良くなれるとは限らない。

むしろ気ままずくなってしまつてクラインとの距離も開きそ
うだ。

「まあ……考えておくよ」

「そうか、まあ無理にとはいわねえよ。会ってないんじゃ人となりもわからんだろうしな、信用しろってのが無理な話だ」

「…悪いな、ありがとう」

ランシールは可動範囲ギリギリにぶんぶんとかぶりを振って、やはりコミカルな動きで否定の意志を示す。

「礼を言うのはこっちだろ？飛び入りがギャーギャー言っちゃまって、聞き入れてくれる奴なんかそうそういないからな。助かったぜ。この礼はそのうちちゃんと返すからな！精神的に！」

「ははっ……ああ、分かったよ」

無表情なランシールの頭部がにかりと笑った、そんな気がした。

「……ほんじゃ、俺はここで落ちるわ、マジサンキューなキリト。これからもクラインを宜しく！」

ぐっと突き出されたランシールの青白い装甲で覆われた右手を、アリーヤの黒い装甲で覆われた右手で握り返す。

「こちらこそ、よろしくな。また聞きたいことが有ったらいつでも呼んでくれ」

「おう！頼りにしてるぜ」

そういって俺たちは互いに手を離す。

俺にとって、アインクラッド……あるいはアーマード・コア・オンラインという世界が、楽しいだけのゲームだったのは、正しくこの瞬間までだったのだろう。

第二話

「は？テストモードが終了できない？」

「お、おお。なんか警告が来て…アテンション？なんだ？ワーニングとか書いてあるけど良くわからん」

どういうことだ？システム的にはそんな警告はないはずだが、テストモードが終了しないなんて事例は テストでもあり得なかった。たしかに回線落ちなんかは何度かあったらしいが、比較的良好い方だったはずだ。

「…いや、テストモードが終了できなくてもゲームそのものは終了できるはずだ、メニューを開いて…」

「だ、駄目だキリト！ログアウトボタンが無い！！」

俺はクラインの慌てた様子で発せられた言葉に本気で耳を疑った。システムの無ければいけないはずのものが無い？そんなわけがない。

いくらこれを販売した企業が不親切でも、セーブやゲーム終了のボタンがないゲームを作らないはずがない。なんだかんだ言ってもユーザー第一の姿勢で売っていたのだから。そうでなければ細かくレギュレーションなんて配信などしないだろう。

「…あのなあ…ボタンがないって、そんなわけないだろ？もう一度よく見てみるよ」

呆れ声でクラインを諭すと、ランシールに乗った赤髪の青年は慌てた様子でもう一度ログアウトボタンがないと云う。

「やっぱりどこにもないって！お前も確かめてみるよ！」

「だから、んなわけないだろ？なんかの見間違いだ」

俺はため息交じりに自分のウィンドウの左上、トップメニューに戻るためのボタンを叩く。

一度機体のステータス画面が開き、それが滑らかに閉じて、メニュー画面に戻った。

機体とは別の、空欄の多いアバターフィギュアが浮き上がり、その左にメニュータブがぎっしりと並ぶ。

俺は慣れた手つきでその一番下に指先を滑らせ

あまりの驚愕に、ぴたりと動きを停止する。

無い、ログアウトボタンが。

クラインの言うとおり、テストや今日の午後一時ごろにログインした時はあつたはずのログアウトボタンが、きれいに消滅していた。まるでそこには元より何もなかったと主張しているかのようには、空白が幅を利かせている。

「ねえだろ？」

「ああ、……無い」

少々癪だが認めざるを得ない、ログアウトボタンがないのは純然たる事実なのだから。

赤髪の青年は俺の様子を見て上機嫌になったようで、少々弾んだ声でこう続けた。

「ま、今日はゲームの正式サービス初日だからな。こんなバグもでんだろ。今頃GMコール殺到して運営は半泣き、ってところだな」

カラカラと笑った青年に、仕返しの代わりに意地の悪い口調で突っ込みを入れる。

「そんな余裕かましてて大丈夫か？さつき五時半にピザの配達頼んでたとか言ってたよな」

「うおっ！そうだった！！」

取り敢えずテストモードを終了の操作をしてみる、が、やはり反応がない。出てくるのはローディングの文字と、注意の文字のみ。

正常な動作で終了させないとネクストのCPUが損傷しますだのその後の動作への支障が云々。

版でもこれについてはいろいろな注意書きがあったので普通に終了させた方が得策だろう。

ともあれ、どうやらこれもクラインの言う通りのようだ。

クラインのピッツアやジンジャーエールだのは今のところどうでもいい。

「クライン、GMコールは？もしかしたらシステム側で落としてくれるかもしれない」

「さつきからやってるんだけどよう…反応がねえんだよ。…うわ！もう五時二十五分じゃねえか！お、おい！キリト！他にログアウトする方法はないのか！？」

情けない声で、クラインはランシールの両腕を大きく広げる。

…なんだかんだいって、クラインはすっかり順応している気がするのは気のせいだろうか。

ともかく、他にログアウトする方法か…。まず、メインウィンドウを開き、ログアウトボタンに触れ、右側に浮かぶ確認ダイアログのイエスボタンを押す。

実に簡単だが、問題はそのログアウトボタンが存在しないことだ。

そして正直に言えば俺はそれ以外の離脱方法を知らない。

「いや……自発的にログアウトする方法はログアウトボタンを押すほかない。…システム側が一斉に俺たちを落とすのを待つしか…」

「んな、馬鹿な……！」

俺の回答を拒否するかのようには喚き、クラインは突然大声を出し始める。

「戻れ！ログアウト！脱出！！！」

しかし、世界はクラインの慟哭に、冷やかな無言で報いるばかりで、応えることは一切ない。

尚もあれこれ唱え、終いにはぴよんぴよんとジャンプまで始めたクラインに、俺は押し殺した声で呼びかけた。

「無駄だよ、クライン。説明書にも緊急切断方法は一切載っていないな

かった」

「でもよ……こんな馬鹿げてるだろ……!?いくらバグったって、自分の部屋に自分の意思で戻れないなんて……!」

全くの同感だ、いくらバグとはいえ、普通は検出された瞬間にプレイヤーはログアウトさせられるはず。

馬鹿げている。ナンセンスだ。しかし、この事態もまた事実。打開策を持たない俺たちは、次の事態を待つしかない。

「おい……おいおい……嘘だろ……?信じられねえ……ゲームから、出られないんだぜ……?俺たち……」

茫然自失とした声でクラインはそう呟き、ランシールにかた膝をつかせ、しばらく沈黙した。

「そつだ……」

暫くの沈黙のうち、クラインは光明の見たような声を上げ、ランシールの頭に手をかける。

「マシンの電源を切れば……!このふざけた状況も終わるはず……!それが出来なくなつて引つpegせばどうにか……!……!」

クラインは半狂乱状態だった、声がわずかに震え、コミカルに動いていたランシールの動きも今ではどこか覚束ない。

俺はクラインの様子を見て、わずかな不安がよぎるのを感じながら、静かに口を開いた。

「……クライン、無駄だ。どっちにしても、俺たちは今、生身の……」

現実での体を動かせないんだ、『ナーヴギア』が、俺たちの脳から体に向かって出力される命令をここで……」

アリーヤが、AMSを通して伝える信号が指先を動かし、人間の延髄に当たる部分を、指し示す。

「…インタラプトして、このアバターを動かす信号に変換してるんだからな」

ランシールは打ちのめされたように、手を下ろし、完全に沈黙する。俺たちはしばし、黙り込んだままそれぞれの思考をめぐらせていた。すると、唐突に、クラインの乗るランシールが姿勢を変える。なんというか、ヤンキー座りに。

「……んじゃ、結局のところこのバグが直るか、向こうで誰かがギア外してくれるまで待つしかねえってことか」

「……ああ、そういうことだ」

首肯しようかと思ったのだが、機体に乗った今の状態では文字通り首が回らないので、言葉で肯定の意思をクラインに示す。

「はー……マジかよ…俺一人暮らしだぜ、おい」

「…それはもう……ドンマイ」

「はああ……」

クラインは再びどん底のようなため息を吐き、沈黙する。かける言葉も見当たらない。

「なあ…クライン、これを作った元の会社も　アーガス　も、こんなバグ、残すと思うか？」

「あ？まあ真面目に考えれば有り得ねえだろうな、　フロム　はそういうところはしっかりしてた会社だし、　アーガス　に至っちゃ顧客第一の姿勢で売ってたんだ」

「だろ？どっちも信用があったからこそ始めてリリースするネットゲであんな争奪戦になったんだ、こんなへマをそうそうするわけがない」

そもそもACCOはVRMMOというジャンルの先駆けでもある。それが正式サービス初日からこのような問題を起こせば、ジャンルの規制にもつながらかねない。

テストモードは仮想の空間ゆえ外気はない上、ネクストの装甲はそれなりに厚いもののため外気は遮断され、

温度調整された生暖かい空気しか入ってこないが、低く息を吐いた際に肺に入ってきた空気は、それなりに冷たく乾いていたように思える。

ちなみに現在のアインクラッドの季節は初冬である。

俺はアリーヤの複眼を上を向けるが、ただただ青く澄んだ空が視界に入るだけで、仮想の光が無機質にどこまでも照らしている。

俺には、その空がどうしようもなく美しく見えて、暫くの間、言葉を失う。

直後。

世界はその在りようを、永久に変えた。

突如、鐘のような あるいは、警告音のような大ボリュームのサウンドが鳴り響き、アリーヤとランシール。もとい俺とクラインは飛び上がった。

「んなっ……っ？」

「何だ!？」

同時に叫んだ俺たちは、突如、淡い光に覆われ、浮遊感に包まれた。クラインがどうだったのかは知る由もない。多分俺と同じような状況だったのだろうが。

おそらくは テレポート 転移 だろう、アイテムを使えば発動することができ。蛇足だが、実はほとんど使うことはない。

だが、俺は今アイテムを握ってもいないしコマンドを唱えてもいない。運営側による強制移動だとしても、何故こつも突然に。

そこまで考えると、視界に移る青の光がひととき強く瞬き、俺の視界を奪い去った。

視界が戻ると、そこはテストモードの廃墟の集まる砂漠ではなく、広大な石畳の広がる、ボロボロになった中世風の街並みを持った”始まりの街”の主街区だった。

遠くには、みてくれは豪華な、くすんだ中世の宮殿が見えている。

気づけばいつの間にか俺とクラインは機体から降りていて、登録したアバターで地に着いていた。

俺は隣でぼかんと口をあけているクラインと顔を見合わせ、二人同時に周囲にぎっしりと幾重にもひしめく人波を眺める。

色とりどりの服装、髪色、眉目秀麗な男女の群れ。間違いなく俺たちと一緒に、ACOPプレイヤーだ。どう見積もっても数千どころではなく、一万人近くは居る。

恐らく俺やクラインと同時に、現在ログインしているプレイヤー全員がこの広場にテレポートさせられたのだろう。

プレイヤー達は少しの間押し黙っていたものの、すぐになんともなくは状況を理解できたようで、広場はざわざわと騒がしくなる。

その声は徐々にポリウムが上がっていき、そこかしこから「どうなっている?」「これでログアウトできんのか?」というような疑問の声が飛び交う。

だが、尚もシステム側からは応答がなく、プレイヤー達は待ちぼうけを食らっていた。

しばらくすると、次第に苛立ちの色合いが募り始め、「ふざけんな!」「GM出てこいや!」…等々少々粗暴な声が上がってくる。

と、不意に。それらの声を押しのけて誰かが叫んだ。

「……お、おいつ!上を見る!!」

俺は反射的に徐々に闇に染まりつつある空を見上げた。

そこには、赤いフォントで彩られた【Warning】の文字と、それに随伴するようにして【System Announcement】の文字が宙に浮かんでいた。

一瞬の驚愕に続いて、俺は、ああ、ようやく運営のアナウンスがあるのか、と安堵する。

しかし、続いた現象は、俺の胸中を不安で深く穿った。

空を埋め尽くす灰色のパターンの中央部分が、まるで巨大な血液の雫のように垂れ下り、粘度の高さを感じる動きでゆっくりとしたたり、しかし、落下することなく赤い雫は空中でその形を変えた。

そこから出現したのは、身長20mほどの、深紅のフード付きローブを纏った巨人の姿だった。

いや、正確には違う。下から見ることでできるフードの中には顔、否、首すらも見えない。何かに遮られているのではなく、何も無い

のだ。

得体の知れない気味の悪さに、思わず足を退けさせる。緊急すぎてアバターが用意できなかったのだろうか？本来であれば髭の老人が眼鏡を掛けた少女がそこに収まっているはずなのだが、今はそれがまるで見えない。

不意に、中身のないローブが、左右にゆらりと腕を広げ、顔のない何者かが口を開いた……気がした。

直後、低く落ち着いた、良く通る男の声が遥かな高みから降り注いだ。

『……プレイヤーの諸君……理想郷へようこそ……』

意味が、掴めない。理想郷……？まあ、ゲーマーにとっては、理想郷とも呼べるだろう。このふざけた状況さえなければ。

啞然としたまま見上げた俺の耳に、赤ローブの何者かが両腕を下ろしながら、ある言葉を告げた。

『私の名は、茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ……』

「っな……！？」

驚愕のあまり、俺は喉を詰まらせる。もしかしたら生身の体も喉を詰まらせたかもしれないと錯覚するほどだった。

茅場、晶彦。その名は、数年前まで数多ある弱小ゲーム会社であるアーガスを、最大手と呼ばれるまでに成長させるに至った、その要因だ。

若き天才ゲームデザイナーにして量子物理学者。類稀なる天才だ。

彼はこのACC0の開発ディレクターであり、ナーヴギアそのものの基礎設計者でもある。

俺は一人のコアゲーマーとして、茅場に深く憧れていた。彼の紹介記事が載った雑誌は必ず買って…思い出せばストーカーのようだが、この際気にしない。

ともかく、今の短い声を聞いただけで茅場の伶俐な容貌が否応なく浮かび上がるほどに、憧れていた。

しかし、茅場は今までに裏方に徹し、メディアを嫌っていたことでネットでは割と有名だった彼が、何故こんな真似をするのだろうか。理解しようと、必死に回転する俺の思考を、茅場の低い声がバツサリと断ち切る。

『…プレイヤー諸君は、既にメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気づいているかと予測する。手短かに言おう、これは、ゲームの不具合ではない。アーマード・コア・オンラインの、本来の仕様だ』

「……………仕様……………?」

クラインが、信じられないものを見る表情で、乾いて割れた唇を動かす、囁く。

その語尾に被さる様に、滑らかな低音のアナウンスが続いていった。

『諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームから逃れることはできない』

城などこの街には見当たらない。何を言っているのか、否。何をしようとしているのだろうか。

俺の戸惑いは、しかし、茅場の次の言葉に一瞬で吹き飛ばされた。

『……また、外部の人間の手による、ナーヴギアの停止、若しくは解除も、有り得ないと断言しておこう。…もしもそれが試みられた場合』

ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウ

エーブが、諸君らの脳を破壊する…』

何を、言っている…？何をしているのか、判っているのか？こいつは。

脳を破壊する。それは、つまり、殺すということだ。

このハード、ナーヴギアの電源を切る、若しくはロックを解除して頭を外そうとすれば、ユーザーを殺す。茅場ははっきりとそう宣言したのだ。

ざわざわと、集団がざわめきだす、だが、暴れたり、叫んだりする者は一人としていなかった。

恐らくはまだ伝えられた言葉を理解できないか、…当然の真理だが、理解を拒んでいるのだろう。

クラインは、茫然自失とした表情で、頭に
現実世界にある
ナーヴギアのある場所に、右手をのろりと持っていく。
同時に、乾いた笑いの入り混じった声が漏れた。

「は、はははは……な、何を言ってやがんだアイツ、頭おかしいんじゃないのか？ ナーヴギアが…ただのゲームのハードが…そんなことできるわけねえ…！」

後半は掠れた叫びとなっていた。

ナーヴギアは、原理的には電子レンジに似たようなものなのだが、脳を破壊、というよりも細胞中の水分を振動させ、摩擦熱によって蒸し上げることは、出力さえあれば不可能ではない、が。

「…ハツタリに決まってる、確かに原理的にはあり得なくもないけど、電源コードを引き抜けば、そんな高出力の電磁波発生させるには、大容量の、バッテリー…が……」

そこまで行って、俺は急激に語尾を細める。その理由をクラインも察知したようだ。

「あるぜ……ギアの重さの三割はバッテリーセルだって聞いた。でも、無茶苦茶だろそんなの…！瞬間停電にでもなったらどうするんだよ！？」

まるで、その声が聞こえていたかのように上空から茅場のアナウンスが響く。

『より具体的には、十分間の外部電源切断、二時間のネットワーク回線切断、ナーヴギア本体のロック解除または分解の試み以上のいずれかの条件によって、脳破壊シークエンスが実行される。この条件は、既に現実世界に報じさせてもらった、しかし』

そこで、茅場は一旦言葉を切る。

『……友人家族等による強制解除が試みられ、残念ながら、既に二百十三名のプレイヤーが、アインクラッド及び現実世界から、永久退場している』

どこかで、細い悲鳴が上がった。しかし、周囲の人間の大半は、信じられない、あるいは信じないとでも言いたげに、ぽかんと放心したり、うすら笑いを浮かべたりしている。

俺もまた、脳では茅場の言葉を受け入れまいとするが、裏腹に、俺の体はがくがくと膝を震わせる。

膝が笑い、俺は数歩よろめき、どうにか倒れるのをこらえる。クラインは、虚脱した顔で尻もちをついた。

213人、死んだ。茅場の言葉通りなら、既に二百人以上がこの場から居なくなっただという事だ。

その中には、見知った顔もあっただろう。俺と同じ、テスターも。

「信じねえ……！こんなただの脅しに決まってる、これだって！オーピングの演出かなんかなんだろ！？」

俺も、全く同じことを頭で考えていた。だが、そのたびに、茅場の確信めいた言い方と、あの受付嬢の『あなたは、この世界で生き残る覚悟がおりですか？』という言葉が駆け巡る。

『……諸君がむこうに置いてきた体の心配をする必要はない、現在あらゆるメディアが改めて警鐘を鳴らしている。諸君らがゲームから強制ログアウトする確率は低くなった、と言っておこつ』

茅場は施設への輸送についてのことを話すと、信じられないことをのたまった。

『このゲームから解放される手段は、アインクラッド最上部、第百層に辿りつき、そこに居る最終ボスを斃すこと。そして、諸君らが機体とともに破壊されるか、生身に致命的な損傷を受けるか、のどちらかだ』

茅場は、一息置いて、そのあとに一つ。注釈を加えた。

『しかし、後者は、ナーヴギアによって脳を破壊され、現実世界からも永遠に解放されることとなる。∴十分に、留意してほしい』

つまり、茅場は、この世界で死ねば、現実世界でも死ぬ、と言ったのだ。

∴俺は無性に哄笑しなくなった、そんな馬鹿な（……………）。それは、全てのゲーム中でもトップクラスの難易度の、このゲームで、一度も復活することなくクリアしろ、ということだ。

基本死にゲーと呼ばれるこの世界で、そんなことができるはずもない。

「は、はははは…あははははは……………」

あの至高と言われた テストでさえ、俺は軽く二百ほど敵ACや戦

車の群れに殺されたのだ。

他のプレイヤーも同様だったようで、テストでは、百層など夢のまた夢、たったの6層しかクリアができなかった。

それを、奴は、死んではいけない状態で、テストの約1.7倍もの層を突破しろと言っているのだ。

「で、できるわけないだろうが!! じゃろくに上がれないって聞いたぞ!!」

クラインの言うとおりだ。いくらコープしてミッションができるとはいえ、安全策を取っても、気を抜けば一瞬で各個撃破されてしまうほどに、このゲームは厳しい。

俺が、ほんの数時間前、家族とともに過ごしたあの世界には、もう、戻れないのかもしれない。

APがゼロになり、機体が爆発すれば、俺のアバターは全ての記憶とともに弾け、そして無となって消えて行くのだろう。

……これは、本当に、現実か……? そんな思いが、俺の頭をよぎる。

その時、赤ローブが右の腕をふらりと持ち上げ、一切の感情をそぎ落とした、冷たい声で告げた。

『最後に、諸君にとって、この世界が現実だということを示そう。アイテムストレージに私からプレゼントを用意した。確認したまえ』

それを聞くのと、ほぼ同時に、俺は右手の指二本を真下に振り、アイテム欄を開く、そこには茅場の言うとおり、《手鏡》というアイ

テムが追加されていた。

……プレゼント？疑問に思い、オブジェクト化させて覗きこむが、そこにあっただのは必死こいて作り上げた勇者顔のAvatarだけだった。

拍子抜けして茅場のほつを目視しようとする、突然視界がホワイトアウトした。

2、3秒たち、視界が晴れる。すると、線の細い少年の顔が鏡に写っていた。

俺が忌避してやまぬ、現実世界の、その顔が。

「……うお？お、俺じゃん」

隣にいたのは、長身の美丈夫ではなく、野武士然とした顔の若者だった。

俺は一度思考して、もう一度若者の顔を見る。

「……お前……クライン？」「……え？お、おめえ、まさかキリトか？」

どちらの声も、ボイスエフェクタが変化したらしく、トーンが変化しているが、気にしている理由はない。

男女比の変化した周囲すらも、平均身長の高くなったことも関係ない。

何らかの説明があるはずだ、と俺は茅場を振り仰ぐ。

「……諸君は、今、何故、とまっていることだろう……。これは、身代金目的や、大規模なテロでもない……」

今まで一切の感情を見せなかつた茅場の声が、憧憬、とも思える情感を混ぜた言葉を発した…：ような気がした。

『私の目的は、まさに今、この状況を作り出すことにあつた……。この世界を作り出し、観賞するためにナーヴギアとACCを作りに上げたのだ。そして今、全てが達成せしめられた』

短い間に続き、無機質さを取り戻した茅場の声が響く。

『以上で、アーマード・コア・オンラインACCの正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の…：健闘を祈る』

最後の一言が、わずかな残響を引き、やがて、赤ローブとともに消えうせた。

広場の上空を吹きすぎる風鳴りだけが、全てが変わってしまった世界を彩る。灰色にくすんだ空は、黄金色の太陽を失い、暗闇で世界を覆っていた。

しばらくして、ボロボロの街頭にぼつぼつと灯りが灯り出す。一万のプレイヤー集団は、やっと事の次第が理解できたかのように、喚きだした。

「嘘だろ……おい！なんだよこれええっつー！！」

「ふざけんな！！ここから出せ！！出せっつてんだよあー！！」

「こんなの困る！！この後約束があるのよ！？」

「嫌あああ！帰して！帰してよおっー！！」

悲鳴、怒号、罵声、絶叫、懇願、あらゆる思いが、無機質な空に響き渡る。

一万人のプレイヤーのうち、多少を除いて、この広場で、足を引っ張り合う。

何故か頭が冷え切っていた俺は、クラインをたたせて広場から退場する。

「クライン、出るぞ」

「へ？あ、ああ」

俺は広場の街路に入り、呆けた顔のクラインをひっぱたく。

「な、何すんだ！！？」

「黙れ、よく聞けよ、一度しか言わないぞ。お前：さっき言ってた仲間を如何しても守りたいか？」

呆けた顔だったクラインは、俺の言葉を聞いて顔を引き締めて行く。

「当たり前だ」

「わかった、ならNPC相手にひたすらシュミレーターをやれ、あれなら恐らくいくら死んでもお釣りがくる。ミッションには絶対に手を出すな」

「…は？な、なんでだ？」

「簡単な話だ、このゲームは基本機体の性能が割と高い。下手にミ

ツシヨンに行って無駄に撃墜されるより、その機体に慣れたほうが
「确实だ」

「な、成程…」

理解できたようだ、このゲームは特色を理解した方が勝率は上がり
やすい。

それに、初心者はまず機体自体の操作に慣れなければただひたすら
的になるだけなのだ。

「で、でもキリト！お前はどうするんだ？」

「俺は…大丈夫だ、あの機体なら、軽いミツシヨンやって金をため
てチューンすれば実用に足る」

俺に付き合わせれば、確実にクラインは死ぬ。そんなことは容易に
想像できた。

ミツシヨンは初期の状態からかなりの難度なのだから、当然だ。

「じゃ、俺は先に行くよ、また会おう」

「あ、ああ…」

俺はひらりと手を振り、北西に、ガレージのある方向に体を向けた。
五歩ほど離れたところで、背中にもう一度声が掛けられる。

「おい！キリトよ！おめえ、本物は案外カワイイ顔してやがんだな
！結構好みだぜ！俺！」

その言葉に、俺は苦笑し、肩越しに叫んだ。

「お前もその野武士面のほうが十倍似合ってるよ!」

そして、俺はこの世界でできた友人に背を向けたまま、まっすぐに、ひたすらに歩き続けた。

曲がりくねった路地を、数分いったところで振り返るが、無論、誰もいるわけがない。

胸をふさぐような、奇妙な感情に歯を食いしばって飲み下し、俺は、駈け出した。

鉄と硝煙の入り混じる臭いを含んだ風が、激しくほおをなでるが、気にもせず、死地へと向かって。

↳ t o b e c o n t i n u e d ↵

第二話（後書き）

疲れた……

感想よろしくです……

第三話

第三話

デスゲーム。

明確な定義のある、言葉ではないのだろう。

肉体的リスクの存在する競技、と言うのなら、格闘技、ロクククライミング、などその他諸々が含まれる。

それらの危険と呼べるスポーツとデスゲームを分ける条件は、ただ一つ。ペナルティとして、ルール上で明記されていることだ。

偶発的などでは決してなく、プレイヤーの失敗やミス、あるいはルール違反等々の罰として、強制的に死を与える。つまり殺す。

その前提に立てば、この世界初となるVRMMORPGアイマード・コア・オンラインは、今や紛うことなくデスゲームに分類されるのだろう。

それは、ゲームの開発者にして支配者である茅場明彦本人が、ほんの二十分前に明確に宣言したからだ。

機体が破壊される、もしくは常識の範疇として現実世界で死ぬような目にあえば、つまり、この世界に《敗北》すれば

殺す、と。

また、彼はこうも言った。ナーヴギアを外すという、所謂《ルール違反》をしても殺す、と。

「ありえない」

そう、ありえない。しかし、あらゆる疑問が、俺の頭の中を駆け巡り、次々と茅場の言い放った言葉に撃墜されていく。

では、何故あいつはこんなことを始め出したのだろうか？………わからない。理解出来るわけがなかった。

でも、あいつの《この状況を作り出すことが私の最終目的だ》という言葉は、恐らく紛れもない本心からの言葉だろう。

あの時だけ、茅場は感情をあらわにしたのだから。だから、俺は俺を生かすために、この道を走っている。俺は奴に負けたりはしない。

「スグ…母さん……きつと……」

俺はあの世界に帰りたい。なんとしてでも、だから、負けるわけにはいかないのだ。

突然、話は変わるが、この世界のミッションは、主に企業間の抗争など、NPCからの個人的な依頼によって成り立っている。基本的に企業からの依頼はレイヴンズネストを通して、個人からの依頼は、酒場やいろいろな場所のNPCから受諾することができる。

俺は、あるものを手に入れるために、荒れ果てたこの道を懸命に走っていた。たった一人で、孤独なまま。

町はずれへと続く道を走り続け、やがて、辿りついたのは、荒れ果てた工場。

ここはある武装組織が根城にする、いわばアジトだ。見てくださいボロボロも良い所だが、中身は存外しっかりしている。俺は、そんな組織の出入りする場所に、息を整えながら足を踏み入れる。

「待ちな、それ以上足を進めたら、アンタを蜂の巣にするぜ」

突如、頭上から声が降り注いだ。

視線をゆつくりとそちらにやると、いかにも、といった風体の熊男が、銃口をこちらに向けて強張った表情で喋りかけて来るところだった。

「……見たとこ企業の連中じゃあ無さそうだな……おい、ここは民間人の来るとこじゃねえぞ。さっさと帰んな」

安堵した表情の熊男は、親切にも首で出口を指していた。しかし、戻ればクエストフラグ再発のために面倒くさいことになる。俺はこの熊男に、すかさず、システム認識ができるようはつきりした声で告げる。

「俺は民間人じゃない」

帰ろうとしていた熊男は振り返り、怪訝な顔で再度銃口

を俺に向けた。

「何だと？企業の差し金か？…それとも……」

「ああ、レイヴンだ」

熊男は、驚いたような表情をして、軽く3mはあろうこ
ンテナの上から飛び降りてきた。

それにしてもいつも思うが、このNPC達の表情の変化
はよく出来ている。感心せざるを得ないだろう。

「ふん……成程な、力になってくれるってのか？」

「ああ」

「まだガキだが…前例がいることだしな……戦力に成れる
だけ成って貰おうじゃねえか」

ついてこい、と熊男はジェスチャーで示す。それと同時
に熊男はなにやら古臭い通信機を取り出し、どこかへ連絡を送った
ようだ。

古臭い倉庫の中には、ごろつきのような男たちが、思い
思いの手段で暇をつぶしている姿があった。しかしそれは俺が入っ
てくると中断され、敵意をふんだんに含んだ視線で俺を貫いてくる。

「まあ…気にすんな。暫くすれば慣れて来る」

「……ああ、解ってる」

簡素な応答を繰り返し、熊男は迷わず道を選び、ある倉
庫で立ち止まりとんとんと扉を小突いた。

暫くして、静かな声が倉庫の中から聞こえてきた。

『入るといい』

「ああ……………行くぞ」
「……………」

中に入ると、戦略室か何かなのだろうか。部屋の中央には机が陣取り、その上はやたらと細かなものが散らばっていた。その奥のソファに、参ったような状況を表すように、青年が体を沈みこませている。左手で覆った顔には、疲労の色が色濃く残っている事が少なくとも10mは離れているであろう場所でも分かった。

「…君が、力を貸してくれるレイヴンか」

「ああ」

青年は、透明感のある声で、そのままの姿勢で、諦めたようになかば呟いた。

俺は無感情にその言葉に応答する。

「…悪いが、僕らから金は巻き上げられないと思うよ。あののはジャンクパーツと、盗品の実験兵器だけだ」

「構わない。俺を雇ってくれ」

「……………君は見たところ落ちこぼれじゃないんだろ？…何故僕らに肩入れしようとする？」

興味が沸いたのか、青年はソファから体を起こし胡坐をかいて俺を見る。ただ、その顔にはやはり疲労の色はあったが。

俺はやや離れた距離を縮めるために二、三步踏み出し、その青年の顔をよく観察する。中肉中背、顔も特徴的なところは無く、覚えにくくて仕方ないと言った風体だ。しかし、疲労の中でも優しい人柄を表すようにやや下がった目尻が少し弱めであるものの自己主張をしていた。

俺はそんな青年に、無表情のままやや突き放した口調で

返答した。

「何だっぺいいだろう、詮索は無しだ」

「……そうだね、こういふビジネスライクな話はお互い詮索しないほうが簡単だ」

彼はため息を吐いて、ソファから重い腰を上げた。それと同時に、頭上に金色の《？》アイコンが光りだす。

「何か困ったことでも？」

数あるNPCクエスト受諾フレーズを荒削りに俺が言い放つと、彼の頭上の《？》がびこびこ光った。

「ああ、最近企業の防衛線が強くてね。物資を奪おうにも……僕らの乏しい戦力では上手くいかなくて、資金が全く集まらないのさ」

つまり、俺への依頼は、企業の防衛部隊の無力化。そういうことだろう。このクエストをこなすことで、ある腕部パーツが手に入る。内容は単純に雑魚掃除なので、かなり楽にスピード重視の機体にとっては最高性能のパーツが入るということになる。

しかし、続いた彼の言葉は俺の予想を斜め上を行き過ぎた。

「そしてね、多分だけど、長丁場になるんだ。行って……くれるかい？」

「……？」

長丁場、ということは大規模ミッション、つまり、ストー

リーミッションになったのだろうか。

基本的に俺はこれに関しては安全マージンをとるつもりは無かったので、少々困惑する、が。

「構わない、ミッション中の回復は出来るんだろ？」

「ああ、問題ないよ。手配はしておいた」

やはりな、俺は薄くつぶやいて、腕を組んだ。大体のストリーミッションにはこれが可能なものが多い。

それにしても、このゲームのNPCの応答能力は的確で、いつでも本物の人間と話している感覚になる。その点でも、茅場は紛れもない天才、ということだろう。こんなシステムを生み出せるのは、現状では奴くらいなものだろうから。

「なら大丈夫だ。場所の座標を教えてくれ」

「ジーザス…！ありがとう、助かるよ。じゃあこれがマップデータだ、参考にしてくれ。僕はオペレーションを担当する」

今更だが、この世界には特定のオペレーターが不在だ。だから、オペレーターが各ミッションで変わってくるのだ。

この場合はこの青年と言うことだろう。余談となるが、ミッションごとに移動方法も変わってくる。近場は徒歩、遠ければへりだ。

「じゃあ、よろしく。増援は出来るだけ出せる様にはするけど、精々MTかノーマルAC程度だからあまり頼りにはしないでくれ」

「わかった。じゃあ現地で」

俺は無理に切り上げるようにして、この真面目な青年との

会話を終了する。

くるりと踵を返し、取ってつけられたようなドアノブに手を掛ける。外に続くトタン作りらしい扉は、悲しげな音を響かせてゆっくりと開かれた。

俺は暗くなっている曇り空を仰ぎみて、恐らくは硬い表情で、ガレージへ歩を進める。電力不足なのか、ランダムに点滅を繰り返す電灯は、心細そうに暗い道を照らしていた。なりふり構わずに、俺はその道を突き進む。

ガレージに着いた俺は、愛想の悪い貸しガレージの店主にウィンドウを見せ、物言わぬ巨人のもとに辿りつく。

スワヒリ語で『最高の存在』を示すその機体は、黒光りする装甲で存在感を顕わにしている。デザイナーにしてみれば恐らくは最高傑作なのだろう。初出のOPでその魅力を存分に見せつけたのだから、きっとそうだと、俺は思う。

「……………力になってくれ」

ぼん、と黒光りする装甲に手を置いて、ゆっくりとそれを撫でる。

それに呼応するように、アリーヤは胸元から装甲を内部構造ごと丸ごとスライドさせ、コクピットが姿を現した。俺はひらりとそこめがけて跳躍し、すぼりと収まった。元から強化人間のた

め、異様に軽い体は、俺の脳から発された信号に応えてくれたようだった。

現実世界ならば、俺は黒光りする装甲に見事に頭をぶつけて目を回していたことだろう。

首の後ろ、ちょうど延髄にある、金属質のその部分に、機体から出るプラグを押しこむ。それと同時に、スライドしていたコクピットは俺を飲み込み、目の前が黒に染まった。

次の瞬間、凄まじい不快感が体を支配し、目の前にクリアすぎる視界が現れて、機体のステータスが出現しては消えて行く表示される文字は、全てClearという緑色の文字が右の辺りに取ってつけられている。これは、全てが正常に作動する、ということだ。

「正常に稼働する……。……当然か」

俺は、そう呟いて、鉄の足を一步、前に踏み出した。

がしゃり、と耳障りな音が響き、足のあたりにコンクリートを踏んだ感触が伝わる。

最初の不快な感覚にも段々と慣れてきて、足や、腕を連動させて動かすこと程度ならそれほど違和感や不快感は感じない。

そこまで確認してUSBメモリらしきメモリの情報を、アリーヤに組み込ませ、ポイントを表示させる。

「意外と近いな、ということとは……」

つまりはこの機体の足でいけるという事だ。一応俺は戦闘モードを起動、市街地戦闘モードに設定して、迷わずその足を踏み出した。自動的にガレージの扉は閉まり、重々しい音が俺の後ろで鳴り響く。

首を動かさないままこの機体の特徴である複眼がジロリと周りを見渡した。俺以外の テスターなのか、それとも命知らずの初心者なのか、どちらにせよそれぞれ特徴を持った機体がちらほらと重そうに閉じられた扉の前を思い思いに徘徊している。

「……………」

その光景を見て、あのヒゲ面のランシール乗りの顔がフラッシュバックする。得体の知れない…否、頭で理解しているのだろう。だが、どうしようもなく得体の知れない罪悪感が、俺の肩に押し掛かる。

爪が食い込むほど強く握りしめた右手と同期するように、ぎゃり、とアリーヤの集音装置が小さく鳴った音を拾い上げた。

俺は、無言でこの貸しガレージとは反対方向に向かってメインブースターを最大出力に持っていった。誰かが驚き体勢を崩してばやいた気がするが、気にしてはいる余裕は俺には無い。

「…ぐあつ…！」

凄まじいどころではない、頭がつぶれそうな不快感が、俺の意識を支配する。オーバード、ブースト。それが俺の頭を不快な感覚で埋め尽くした機能の名前だ。当然ながら、元より人間には無い機能なのだ。その上生身だろうがどんな乗り物に乘ろうが体感しようもないスピードが体に襲いかかってくるんだから不快感は相当なものだ。

その他にも強化された身体だというのに凄まじいGが俺の意識を刈り取るうと姿を見せずにとわりついた。

気付けばアリーヤの足は地面についていて、不快な異音

が耳に飛び込んできている。

まるで、何かが削れていくような、そんな感覚。不快感に包まれた俺は、それでも痛みを感じずそのままコンクリートの上を滑っていく。

そうしているうちに、目標ポイントに到達したようで、聞き覚えのある青年の声が鼓膜を打つ。

『やあ、来てくれた様だね。感謝してもしきれない』

やや重いものの、青年の声は戦場の雰囲気とは全く関係ないような意志を孕んでいた。俺がその言葉に一瞬戸惑い、返答が遅れる。

『…まあ、どっちにしても早めにいこうか。じゃBRFを始めるよ』

そこから声の雰囲気は一転して、真面目なものへと変わる。伊達に戦場を切り抜けてはいないのか、その声には一部の隙も見えなかった。

『まずは奪取目標だね、今から約0035にこの場所を通る列車に、僕等の目標とする物資が積み込まれている。依頼内容はこれで分かるとおり、その奪取だ。まあ、ACに乗っていれば楽に飛び乗れるだろう。問題は、同様にそこに乗っている複数の連装レーザーカノンとGA製のノーマルACだ』

そこまで言って、青年は少し息継ぎをする。…俺の頭には疑問が渦巻いていた。…こんなにAIの知能が高かったっけ？そんな俺の疑問は、続く言葉によって遮られる。

『…君の機体なら大した脅威ではないと思うけど、後者のバズーカの一撃には注意してくれ、ミラージュが最近開発した新兵器を使っているらしい。攻略法としては、…そうだな、僕としては動力部分を破壊することを推奨したい。ま、それで動きが止まるかどうかは別としてね』

青年は、的確に敵について注意するポイントと、推測ではあるのがウイクポイントを教えてくれる。

割と適当だが、教えてくれていてるだけ親切だろう。

『それで電力供給が止まるはずだから一応連装レーザー砲は停止すると思うよ。敵を壊滅させたら何とかして列車を停止させるか、それが出来ない場合は列車内に侵入して物資を強奪してくれ。強奪だった場合はその物資の量に応じて報酬を支払う。…今はこんな所かな、じゃあ健闘を祈るよ』

このゲームにおいて、初見の場合こういったBRFは非常に大事だ。一度挑戦して、戦線離脱などによる理由で様子見だけ済ませるのもいいのだろうが、ネストからの評価が下がり、ミッションを回してもらえなくなる場合も多いので、非効率極まりない。できれば避けたい事象だろう。

なんにせよ、ミッション内容は俺にとっては初めてではあったが、この手のミッションならフロムは星の数ほど生み出してきたのだ。驚くほどのものではない。

「存外楽に終われそうだな…これが単体のミッションなら」

そう。忘れてはいけけないのはこのミッションがストーリーミッション（別に階層が解放されるために必要なミッションではないが、過去シリーズの名残でこう呼ばれている）ということだ。

実に厄介なことに、長丁場が故に精神が持たなくて死んでしまうというミツシヨンの種類でもある。

AMSはその特性上、長丁場には完全に適さない。操作する時の多大なストレスによって日常の記憶が飛んだという事例もテストの時もちらほらとみられた。

どうやら茅場はこのデスゲームに、気が狂うようなシステムを組み込んでそのままにしたらしい。…これも奴の言う《仕様》というやつなのだろう。

『あー、あー、聞こえてるかい？ 作戦開始5分前だ、準備してくれ』

「了解」

沈んでいた俺の鼓膜に、先ほどとは比較にならないほど軽い声が響き、俺はそれに即答して、ブラスターを吹かせて機体を浮かせた。

先のオーバードブーストほどではないにしろ、多少の不快感が頭を駆け巡った。

テストのときは無いこの不快感にやられたプレイヤーも多いので、あまりテストに頼るのも都合が悪かったりはするが、なんといつても機体に慣れて腕を身につけなければそれどころではない。

「つと…戦闘モード切り替えねえとまともに戦えないな」

忘れていると気付かぬままにボコボコにされる。フロムも大概鬼畜で変態だ。

それにしても、これも頭の中で切り替えれば済む話だというのに手元にボタンがある辺り、何らかのこだわりか、ただ単なる嫌がらせのようなものを感じる。

そんなことを喋っているうちに、待ち人が、轟音と共に姿を現した。

長い、とてつもなく長い鉄の塊が、地面を滑走していた。ホバートレインというやつだろうが、微妙に浮いている。辺りそんなニュアンスで間違いないと思うが、あまりに唐突で茫然としてしまった。

「クソッ！聞いてないぞ、おい！」

『何をしている！いいから飛び乗るんだ！行ってしまっぞ』

！』

その、俺が思わず『な　　げえっ！！』と叫びたく

なった馬鹿のように長い列車は、俺を確認するや否や、連装レーザ砲から光を瞬かせながら直進してきた。

俺はその弾道を苦勞しつつも読み、射線から外れるように移動すると、青年の叱咤が鼓膜を叩く。

「んなこと言われても…！」

『クイックブーストだ！それで一瞬で奴の懐に飛びこめるはず！多少無理をしてもやってもらわないと、報酬は払えないぞ』！

「…っクソがッ！！」

連続した、くぐもった爆発音が機体につけられたブースターから放たれる。それと共に、ずしりと不快感が頭を打った。

「　　オオオッ！！っらあッ！！」

不快感を無理やり振り切り、右手に装備された長方形の

ブレードからエネルギーが放たれて、進行方向にいたノーマルの装甲を深く穿った。

範囲は短いものの、威力は保障されているだけはある。あつという間にバラバラにされた装甲の破片は、溶けて液体となり列車の装甲にぼたりと落ちて、あるものは列車から叩き落とされていく。

「…ッ！遅いッ！！」

着岸に気が付いた連装レーザー砲がゆつくりと、高出力のエネルギーを充填させながら俺に目を向ける。

しかし、アリーのスピードは疾風もかくやと言う速度でそれらに肉薄し、右腕を渾身の力で振り抜き根元から、膨大なエネルギーによって切断せしめる。

動作の一つ一つを行うたびに、息のつまるような苦痛が精神を圧迫するが、そんなものは関係ない、と言わんばかりに、俺はアリーのメインブラスターに鞭を打ち、鉄で作られた列車の上を直進させる。

敵を見つける度に右手に装備されたレイレナ ド社製の、通称ヒットマンが唸りを上げ、仕留めきれない鉄屑どもを同じくレイレナード製のドラゴンスレイヤーで屠っていく。

そんなことを続け、しばらくすると、この列車の内部に入るためのハッチが姿を見せた。その上に、ちらりとターゲットを表す表記が現れる。

「よし。これで…」

目処が付く、という俺の言葉を遮るように、俺が乗るアリーの肩を、レーザーの青白い光が削って行く。刹那、肩に焼きゴテを押されたような感覚が走った。

「ッ！！ぐあああっ！！」

焼ける様な感覚が、俺のアバターを貫いた。被弾反動と、何より俺の怯みによって機体が完全に停止する。

がしゃり、唐突に、そんな音が列車の上に響いた。複眼だけを動かして、そちらを見る。

「はあっ…はあっ…。ハイエンド、ノーマル…か…！？」

荒い息で、突如現れた機体の特徴を確認する。

どうやらミラージュ製のフレームで組まれたEOTタイプイクシード・オービットの軽量機のようなのだ。

それだけならば特に問題はない。しかし、厄介なのは、武装がどうにかしているのかと思うほどに高火力だということだろう。

「…カラサワに月光とは…僕の考えた最強の機体って訳でもあるまいし…」

その機体の右腕に装備されたのは、ポジトロンライフルのような形状をした大振りのハイレーザーライフル。名前はKARASAWA。

左には、最強の呼び声高い”ムーンライト”と呼ばれる黄色に彩られた特徴的な形状のレーザーブレードだった。

……実にロマンあふれている。

ともかく、今のところ判断が付きにくいのが、ネクストという確率は低い方だろう、と思いたい。

だが、どちらにせよ、ゴリ押しのできるノーマルとは違

い、ハイエンドを相手にするととなると、広い場所で自由に動いて射撃するのが最も有効な戦闘手段だ。

「ここで列車から離れるのはちときつ過ぎる条件だな……」

ダメージ覚悟で突撃してもいいのだが、アリーのフレームは高い上、先ほどのように痛みに硬直してしまえばそれで終わりだ。火力も高い故にそんなことは避けたい。

その点では、構造的にも、中に入っているプレイヤー的に言っても正直あちらの方が幾分か有利だ。

武器も確認したが、実弾兵器はほぼ無いに等しく、ブレードをシールド代わりに出来なさそうだ。

「……一発で決めるしかないか……」

肩に装備されているレーザーカノンをゆっくりと展開し、FCSがミラーージュ製の軽量ACをロックする。

「ふん……ネクストか……精密に動くだけが能のガラクタが……消え失せる！」

「誰がッ!!」

肩の武器が、膨大なエネルギーを解き放とうとしたその瞬間、ミラーージュ製のACが突如爆炎を上げ、火に包まれる。

爆風がアリーのやや軽めな機体を煽り、俺はそれに驚いてバックブースターを吹かせてしまい、後退してしまった。

「うおっ……！ぐ、グレネード……か？」

「レイヴン、救援だ。遅れてしまって済まない！同業者が助けに来てくれた！」

「救援…？誰が…」

青年の真面目くさった声が予想外の言葉を紡ぎ出した。
俺はリーダーに光点が写ったのを確認し、その方向を仰
ぎみる、すると、そこでは丁度、クレスト製の中量機が列車めがけ
て振ってきているところだった。

～後半へ続く～

後書き

感想という感想は無かったりします、申し訳ない

10月24日、加筆修正致しました

第三話（後書き）

やや駆け足かもしれませんが、お楽しみいただけただけでしょう？
続きについては速めに書くので勘弁して下さい。

感想等宜しくお願いします。

第四話

第三話（後編）

ホバートレイン、とでも言うべき鉄の塊のハッチから、正にロボ
ットと言つべき、灰色の無骨な機体と、所々尖ったデザインの黒光
りする機体が飛び出してくる。

そして、積み荷を失くしたそれは、役目を失い、存在する価値な
どない、と言わんばかりに山にその巨体を直撃させ、辺りが凄まじ
い揺れに包まれた。

『 目標の回収を確認。敵機影、……オルクリア。思
つたよりやるね』

青年の感心したような声を聞いて、俺は背中にある鉄の感触に、

その身を任せた。取り敢えずは第一段階は終了。

だが、それも一重に先に行くクレストの白兵戦型のパイロットのおかげだろう。

無骨なその機体は一瞬だけ俺にその赤いモノアイを向けると、更にブースターの推力を上げ、ガレージポイントへ向かって直進していった。

『聞こえるかい？そのままガレージポイントへ向かってくれ。既に補給用のヘリも向かわせている』

「わかった。……あの機体のパイロットは？」

『ああ、確か……『コペル』だったかな。柔弱そうな青年だったけど、知り合いか？』

「いや、気にするな」

『そうか？まあいいや、それじゃこれで、多忙な物でね』

青年は人間臭い答えを俺に送ると、軽い言葉を掛けて通信を切った。

アリーの複眼を通して見える風景から、サウンドオンリーの文字が消えて、機体のステータスと、前に行く機体だけを映す。

”コペル”、印象深い テスターの名前を欄にして頭に浮かべてみるが、覚えがない。

だが、多少無理をしても、ここに来るということ、あの機体の組み方では何とも言えないがあの腕部パーツを知っているということ。

そして何より、あの戦いぶりから鑑みるに恐らくは テスターなのだろう。

そんな俺の勘ぐりを知ってか知らずか、前方の機体はさらにスピードを上げて指定されたガレージポイントに機体を駆る。

スピードを上げること、というか操作自体にまだ不快感は残るも

の、仕様であるのだからどうしようもない。

俺もアリーのメインブラスターの推力を上げて、灰色の機体に追隨していった。

暫くすると、廃墟のような街が現れた。人が住んでいるので廃墟と言っわけではないのだが、その荒廃っぷりは万人が万人廃墟と答えるだろう。

アリーの複眼で街を見回すが、生活感があるような場所は見当たらず、ところどころライトは付いているが、その光を受けるものは一人として存在しない。

更にいえば、弾雨にさらされたであろうビルの外壁は、どこもかしこも綻び、今にも崩れ落ちそうだ。

閑散とした大通りを通り、誘導にしたがって細かな分岐のある路地を通って、人目から逃れる様に置かれたガレージに機体を滑り込ませた。

「……………はあ……………」

俺の心中は、『なんかなくなった』という言葉で表現できただろう。実に簡素なものだ。機体が完全に停止して、跪く。

それと同時に、鮮明だった視界がフェードアウトし、真っ暗な、何も見えない空間。”闇”と形容するべき空間に放り込まれた。

何かが首から外れる音と感触が伝わってくるが、なによりも、言いようも無い恐怖が俺の心を塗りつぶそうとしてくる。

緊張で肺に溜まった空気を、一気に吐き出して、アリーのコクピットをスライドさせた。

今まで見えていたクリアなものよりは鮮明ではないが、リアルな風景が目の前に現れ、再び安堵し、溜息を吐く。

「ナイスファイトだったよ。取り敢えずこれで一段落だね」

突然、俺の目に現れた少年は、俺に励ましの言葉を送ってくれた。予想外のことと、一瞬だけぼかんとしてしまふ。

俺は直ぐに我に返り、アリーのコクピットから飛び降りて、礼を言う。ここら辺は最低限の礼儀だろう。

「さつきは助かった、あのままじゃこいつも俺もこんな状態で帰れていたかわからなかったからな」

「良いんだよ、目の前で死なれるってそんなに気分のいい物じゃないし」

目の前の、俺より少し背の高い、眼鏡の似合う少年はそういつてその眼鏡を人差し指で押し上げた。

それにしても、真面目そうな少年だ。先ほどの青年とはまた別の真面目さ。

ある種危うさを感じさせるような雰囲気だが、その細い目がそう思わせるのだろうか。

「やあ、想像以上の成果で驚いたよ。これなら大分規模も大きくできそうだ」

心底安心した表情と、嬉しさを織り交ぜた様な表情で、インカムを着けたままの青年が駆け寄ってきた。所謂ホクホク顔、というやつか。

心なしか不健康一直線だった顔色は若干赤みを帯びている。そんなにうれしいか。

しかし、ともかく人間臭い。カーディナルシステムはここまで精

密なNPCの表情の変化を可能とするのだろうか。

受付の女性の受け答えも、やたらと人間くさく、少々戸惑った覚えがある。

「修理はどれくらいで終わる？」

「ん…そうだな、多分10分程で終わるよ、傷が付いた分は報酬から差し引かせてもらうとするよ」

「現金な…」

「そうでもしないとやってられないんでね。じゃ、準備ができたら機体に乗ってくれ」

青年はそういつてつかつかと有るべき場所に向かって行った。残された俺とコペルは顔を見合わせて、次にそれぞれの機体を目を向ける。

機体は直ぐに男どもに囲まれて、修理されていた。

溶けきつてはいないものの、レーザーをまともに食らった肩の部分は抉れていて、装甲を新たに付け足して溶接するようだ。

ずいぶんと細かいことまで手を抜かない。ご苦労なことだ。色んな意味で。

「……それにしても」

コペルが、自らの機体を眺め、その視線を外さぬまま、おそらくは、複雑な顔で呟いた。

俺はアリーヤの溶けた肩装甲から目を離し、コペルを視界に収めて次の言葉を待つ。

「…ホントに、ここはデスゲームなのかな…？こうやって、普通にやってみると、全然実感がわかなくて」

「……………」

ソレは、正直に言えば判らない。本当に、この場で命を絶てば、あちらの世界でも俺が死ぬのか。

思考は堂々巡りで、いつの間にか完全に停止していた。やってみればわかるんだろう、その場で死んだ”そいつ”は。そいつだけが、真実を知ることができる。

恐らくは、自らの命を引き換えに。だから

「分らない、けど」

「？」

俺はコペルを視界から外して、肩部装甲の修復が終わったらしいアリーヤを視界の中央に持っていく。

黒の巨人は物言わず俺を見返して、装甲の黒い輝きで俺の 現 実世界の姿そのままの俺を映していた。

「……………？どうかしたの？えーっと…」

コペルはそこまで言って、わずかに逡巡し、俺の顔をやはり躊躇ったように見て 気づいた。

「あ、ああ。悪い。自己紹介がまだだったな。俺はキリト」

「いや、こっちこそゴメン！僕はコペル。よろしく、キリト」

なんとも間抜けなことに、俺たちは二人そろって自己紹介を忘れていたようだ。思い出したように二人揃って名刺の交換でもするよ うに頭を下げ握手する。

そして、沈黙。どちらの間抜けなことをしたことで、恥ずかしいやら何やらの沈黙だろう。非常にイタイ。

「……って、アレ？キリト？……どこかで……」

「……気のせいじゃないか？俺そんなに目立たなかったからな」

「……じゃあ気のせい、かな。ゴメン、変な探り入れたりして」

別に隠す必要も無いのだが反射的にマズイ、と直感し、即座に、自分で言っておいてなんだがいやらしいタイミングでそう言う。

コペルは思い直したのかやや疑わしげだったものの、話題を見つめるために思考の海に入ってしまった。

どうにも話しづらい雰囲気の流れているうちに、雇い主の青年の声ガレージに響いた。

『二人とも機体に乗ってくれ。BRFについてはミッション場所に向かいながら説明する』

「了解」

言葉少なにアリーヤのコクピットに向けて身を躍らせる。アリーヤは片膝をついた状態なので先ほどよりも楽にすぱりと入った。

ちよつと着地をミスリ、顔を背もたれにぶつけたのはご愛嬌だ。顔を抑えつつ、首にある金属の感触にAMS用のコネクタを押し込む。相変わらず不快な感じだ。

そして、最大限の不快感が頭を襲い、一瞬だけ眩暈にも似たような感覚にふらりと視界がくらむ。

これも幾度となく繰り返してはきたものの、未だに慣れる事は無い。俺は、跪いているアリーヤの巨体を持ち上げ、ガレージの扉を無言で見た。

#

ミッションの内容…大層な言葉で括ったものの、結局やることは喧嘩の手助けらしい。ライバルの勢力がどこかと手を組んだらしいので、それを邪魔する。

なんとまあ、正直言えば各自でやってほしい。下らな過ぎて反吐が出そうだ。黒い哄笑の人風に言えば『これがネクスト二機を出すほどの任務なのか?』と、言ったところだろう。

とはいえ、簡単な任務だ、評価はどうあれ無事に生きて帰ることの出来る任務ならそれに越したことは無い。精々、稼がせて貰うこととしよう。

と、いうわけで現在俺はそのグループの輸送部隊が通るルートの手度上に差し掛かっていた。

通常のブーストでもアリーの消費エネルギーは厳しいが、この程度なら造作も無い。近くに崖もあるのだからそこでブーストの残量が回復するまで待てばいいのだ。

「…………行くぞ、コペル。気を抜くなよ」

『ああ、くれぐれもこんなことで死なないように』

俺たちはどちらも重々しいものの言葉を交わし、俺がアリーのスピードを生かし、先行する。

くぐもった噴射音が連続し、ブーストの残量が目に見えて減っていく。ゲージが消滅する、その刹那。視界がぐるりと反転し、進行方向とは逆の方向に体が向いた。

続いて前方から押されたような感覚が足に響き、地に降り立った。不意打ちするつもりだったのだろう。ノーマルACがブレードを振り上げて襲ってくるが、その場でドラゴンスレイヤーを振り、胴体を両断する。

そのまま振りぬいた勢いを利用し、左手のマシンガンを唸らせながら敵の群れを薙いだ。多少はダメージがあるようで、動揺とともに敵にプレッシャーを与えたようだった。

『くっ！くそっ！ネクストだど！？こんな話は聞いていないぞ！おい！本社に今すぐ連絡を』

『させるか…！』

敵の群れに、鉄の巨体があっさり突っ込み、出力は弱いものの、その程度を薙ぐなら問題ないとも言つように彼の機体の左に装備された光刃が猛威を振るう。

何とまあ、大胆なことをするものだ。下手をすれば袋叩きに会いかねないというのに。

とはいえこのまま指をくわえてみているわけにも行かないだろう、報酬分の仕事はしなければ。

「はっ…！」

軽く気合を入れて、左の腕からマズルフラッシュを瞬かせながら敵の群れに飛び掛る。

ブレードを振るえば紙のように散り、マシンガンが十数発あたったところで崩れ落ちる。ACは、脆い。否、この銃の威力が桁違いなのだろう。

このゲームの設定では、武器の技術が卓越し、それに追いつくほどの装甲が作成されていないのだという。

軽く、硬く、加工しやすい。そんな金属が無いのは、どうやらこ

の仮想の世界でも同じらしい。

だが、そんなことは関係はない。というより気にしてなどいられない。

しかし、そんな言葉とは裏腹に、俺たちはつつがなくせん滅を完了させ、辺りに破壊された鉄屑がごろごろと散らばる。

拾ってジャンク屋にでも売ればそれなりの収入にはなりそうな量だが、そこまで貧乏ではないので目はくれない。

かかった時間は、約一分。呆気無い、といえばそこまでだろう。相手はノーマルばかりだったんだから当然と言えば当然なんだろうが。

『…補給はあるかい？大分楽に終わったようだけど』

「弾薬の補給を頼む。ヒットマンの弾が半分を切った」

『僕の方はいらぬ、使ったのは殆んどブレードだけだったから』

多少疲労したかのようなコペルの声が、耳に響く。踏みこみも行うが為に通常よりも消耗が激しいらしい。

似たような事を以前やっていて、俺にとってはそこまで違和感がなかったが一般に言わせるとそういうことなのだそうだ。

俺としては休んだ方がいいと思うが、コペルにその旨を話すと『まだ行けるよ。これくらいじゃくたばらないさ』と言ったために、先行してもらったことになった。

「……………」

何か嫌な予感がよぎるが、俺は補給ポイントに向かいながらかぶりを振り、嫌な予感を振り落とす。

そつえば、今は何時だろうか。大分時間がたったように思えるが。頭上を仰ぐと仮想の月が、不吉に、にたりとほほ笑むように、

瞬いた。

#

闇の中に、幾つもの火種が生まれ、その存在を主張するように燃え盛っていた。瓦解しかけていた建物は無残に崩壊し、見る影も無い。

彼方此方から硝煙と血と、鉄の焼けるにおいが漂ってくる。好んでこの中に入る馬鹿はいないだろう。

そんな中で、機械らしいデザインの人型が、左の腕からエネルギーを発しながら目の前の鉄の塊を切り崩した。

何機屠っただろう。紙屑のように爆散する機体を見て、僕もやがてはこんなふうになるのか、と心に冷たいものがへばりつく。

金の閃光が幾本も、視界の端から飛来し、カメラを掠めるように飛んで行った。

「……僕は……」

帰る必要が、有るのか？ そんな疑問が、頭を過ぎる。

起きて、朝食を摂り、学校に登校して、家に帰ってきて、夕飯を摂って、ゲームして、宿題をして、寝る。

ありふれすぎて、つまらない、そんな日常。そんな時現れたこのゲーム。爽快だった。

敵を斬り、時には爆殺し、翻弄する。

なんとなしに応募した テストに当選し、なんとなしにプレイし

て、どつぷり、文字通り嵌った。抜け出せなかった。手放すなど、とんでもない。

それが正式サービスの日、裏切られた。蓋を開けてみれば、とんだパンドラの箱だったのだ。

そのショックたるや、凄まじいどころではない。恨んだ、彼を、茅場晶彦を。否、恨んでいる。

本人からしてみれば当然とすべきなのだろうか？それとも、こんなことをしていても、まだお門違いだと言いつ張るのだろうか？

解らない、理解しようとも、思わない。奴は100層まで辿り着けばこの世界は終わる、と言った。

僕はどうしたいんだろうか？…デスゲームとなった今でも、このゲームは僕にとって楽しかった。

終わらせたくない。こんな時間がずっと、ずうっと、永遠に続けばいい。でも、まずは生き延びないと。

先ほどから煩いハエのような回転音。目障り…いや、耳障りだ。

「…死ね」

クイックブーストで飛翔し、操縦席を踏み潰し、1000マシで残った砲身を削りきった。

何も思わない。リアルな視界は、踏み潰した足の下に赤いものを写していたが、何も思えない。

また、煩い音が聞こえてくる。ヘリ？どうだっていい。壊す。壊しつくす。全部消えてしまえ。

クライアントの声は、僕には聞こえなかった。

#

弾薬を補給し終えて、オーバード・ブーストの不快感に苛々しながら指定戦闘領域に急行する。

今回も組織間の争いの粛清らしい。直進し続けると、火に包まれた街が見えてきた。アリーの複眼が自動でズームする。

「っ……。何だこりゃ…ボス戦でもあるまいし……………」

思わず顔を覆いたくなるほどの光景だった。火にあぶられるヒトと金属で作られた機械達の死体。

あまりにも生々しく描写されたそれは、このゲームが全年齢対象であることを疑わせるほどの生々しさだった。

その中心で、金の閃光を押収し続ける存在が有った。

二機は人外の動きをして、狡猾に裏を書き続けようと、飛び回る。

一機は、物言わぬNPCが操作する、鈍重そうな機体。脚部はタンク型で、肩の横にライフルとガトリング、腕にはバズーカとハイレーザーライフルを持っている。

オーバード・ブーストを小出しにして加速し、ドリフトをしながら両手に持つ超火力の銃で飛び回る機体をタゲリ続けている。とてもではないがNPCに操作させているものとは思えない。

もう一機、常にタンク型の頭上を支配するその機体は、建物を蹴

り、間を潜り抜けながら右の通称1000マシでタンク型の装甲を削っている。

時折凄まじい爆発と、小規模の爆発が起こる、彼の持つグレネードと、12連ミサイル。そして、タンク型の分裂ミサイルだろう。

『死ねえッ！！ッグ…NPCが…舐めた真似を…！！』

『キエロキエロキエロ…！』

通信領域まで辿り着くと、そんな声が耳を打つ。

一つは、聞き覚えのある真面目そうな少年の声。もう一つは、重々しい、声の響きは青年のようだが、しわがれ、老人のような声だ。共通するのは、ただ只管、敵に対する怨嗟の声。

タンク型の頭部がグレネードをまともに食らい、派手に弾けた。ハイレーザーの淡い青色を湛える暴力のような光の奔流が、クレストの白兵戦型の右腕をもぎ取った。

それを意にも介さぬように二機は戦い続ける。俺はあまりの人外ぶりに、呆然としていた。

一つの攻撃手段を失ったクレストの白兵戦型は、狂ったように左肩のグレネードランチャーと12連装ミサイルポッドを唸らせる。

その攻撃は、鈍重な機体には到底回避しきれるものではなかったのだろう。何発も何発も着弾して、そのたび堅牢そうな装甲が剥がれ落ちていく。

タンク型は負けじと弾切れしたらしいハイレーザーとバズーカをかなぐり捨て、肩にマウントされていた二丁の物々しい雰囲気をつ銃を構える。

圧倒的な弾幕は、ミサイルを撃ち落とし、グレネードを着弾する前に排除する。

埒が明かないと判断したらしい白兵戦型は、オーバード・ブーストとクイックブーストを併用し、一瞬でタンク型の背後に回りこみ、

グレネードとミサイルの洪水をまともに浴びせた。

一瞬タンク型は体勢を崩した、と思ったが、すぐに前方にオーバード・ブーストを噴かせ、ドリフトで反転し、ガトリングを空転させた。

しかし、すでに戦いは終わっていたようだ。クレスト型の残った左腕が、人間で言う胃の辺りにこつんと音を立てて当たり、タンク型は、永遠に沈黙した。

その背中からは、オレンジ色の光刃が物言わず伸びている。タンク型は脱力したかのように、両腕を下ろし、虚空を見つめる。

人外同士の勝負は、決着した。俺は、ブレードを突き刺したまま動かないコペルに話しかけようと口を開いた瞬間。

『キリト君。それが破壊対象だ』

鉄の冷たさを思わせる青年の声が、鼓膜を叩いた。

「何……？」

『何度も言わせるな。そこにいる機体は、裏切り者だった。よって、排除する』

裏切り者……？どういうことだ？疑問が渦巻いた頭を整理しようとした瞬間、がくり、とアリーヤが揺れた。

一気に視界が収束する。この感覚は、クイックブーストか？と思っただその刹那。

《System message》

「ッ！？な、なんだ!？」

俺が機体を動かそうとすると、赤いメッセージが視界の中央に現れた。

《強制コントロールシステム、作動。プレイヤー、キリトのコントロールをカーディナルに譲渡》

《バグとして検出された、プレイヤー、コペルを強制排除》

《一時的に、プレイヤーのアバターは、制御不可能となります。ご了承ください》

《

何故、と思う間もなく、俺の視界の端に、握り締めたアリーの拳と、長方形から吐き出される長密度の光刃が見えた気がした。

次の瞬間。呆然としていたコペルの乗る機体は、腹からその鉄の身体を絶たれた。

小さなパーツが、宙に舞い。呆然としたコペルの顔を、アリーの複眼は、残酷に、鮮明に写す。

そのアバターが、淡い青の光を撒き散らしながら爆散するその瞬間も。

『……………苦勞』

鉄の冷たさを思わせる青年の声が、別の人物の響きを纏った事も、俺は気づけない。

呆然と、機体を引かせ、現実を受け入れるまいと、俺は、勝利したものなど居ない街を去る。

#

「…今回は助かった、ありがとう。そうそう報酬のパーツは先に君のガレージに送っておいたよ」

何でもないように、青年はそう言った。

コペルの裏切りなど無かったかのように明るく振る舞い、優しいげな声で荒くれどもの士気を高めている。

それは、裏切りに対して発した凍えきった声を微塵も感じさせないような、人間味さえ感じる暖かい声だ。

「……ああ」

対する俺は完全なグロッキーで、力なくそう答えるしかなかった。青年はさして気にする様子もなく仲間たちの団欒の席に参加する。

コペルのアバターが鮮烈に爆散する光景が、網膜に焼きついて離れない。

とてもではないが目の前に出されたジンジャーエールのような飲み物が喉を通る気はしなかった。

無為に手の内で容器を回しながら氷をカロコロと鳴らす事で気を紛らわせる。口に含んでみても味も風味もわからない。

不意に、青年は何かを持ってその場を離れた。人目を気にするように恐らくは本部兼戦闘員の宿泊場所のガレージからこそそと出て行く。

「……………?」

興味を惹かれて、重くて仕方がない腰を上げる。堂々とは言えないものの青年を逃がすわけにはいかないの、小走りで彼の後を追った。

NPCらしい戦闘員の凶太い男たちは気にすることもなく酒らしきものを酌み交わしている。こちらには興味もないようだ。

ガレージを出ると、電灯が淋しげに地面を照らしていた。その向こうに、走っていく青年の背が見える。結構速い。

急いで追って行く。見失わないようにほぼ全力疾走で。

青年はあるごちんまりとしたタン造りのガレージ…というよりは小屋の前で立ち止まり、ドアノブを回し、そこで追いついた俺に気付いた。

「……………好奇心旺盛な人だね、キミは。まあいいよ、どうせ隠す事で

もないし」

俺を見て、青年はドアノブを回しながら中に入るように促す。中も簡素な物で、少し大きめの本棚と、ベッドとテーブルが置いてあるだけだ。そのベッドに、年の頃七、八歳と思しき少女が横たわっていた。

テーブルに置かれたライトにぼんやりと照らされた顔色は非常に青い。首も細く、シートから覗く肩は骨ばっている。

少女は、青年がそばに置かれた椅子にゆっくりと腰を掛けると、うつすらと目を開き、次いで、俺に目を向けた。

俺は驚き、立ち尽くしていると、血の気の無い唇に、精一杯であるう微笑みが浮かんだ。

青年が右手をのびし、彼女の体を支え、起き上がらせる。途端、彼女は身を屈めせき込んだ。茶色の三つ編みが、白いネグリジェの背中で力なく揺れた。

俺は彼女のカラーカーソルをもう一度確認する。NPCのタグが付き、傍らには《Agatha》と表記してあった。

「アガサ。ほら、この人が僕らに資金をくれたんだ。そのおかげでこの薬も買えた。これを飲めばきっと良くなるよ」

少女の傍らに用意された簡素なデザインのコップに、水を注ぎながら青年はそう少女に言う。

青年の目には、どこか諦めの色が浮かんでいた。恐らくこの少女はそう長くはないのだろう。

そのことをわかつているのか、そうでないのか、アガサは可愛らしい声でうなずき、手渡されたコップと錠剤を受け取った。

錠剤を口にほすり、水を飲む。コップには半分ほど水が残っているが、もう飲まれることもないのだろう。所在なげな青年がコッ

プを受け取り、やはり所在なさげに微笑んでいた。

「……ありがとう、お兄ちゃん」

そして彼女は俺に、やや舌足らずな、宝石のような言葉を紡いだ。

「……………あ……………」

喉に引っかかった言葉が、どうしようもなく辛い。

ある事情で、俺一人で妹を看病した時のことが、フィードバックする。

その時の妹の表情が、目の前の、健気に確かな笑みを浮かべた彼女とリンクした。

「……………うっ……………く……………」

そんな言葉にならない言葉が、勝手に喉の奥から漏れ出した。

会いたい。

直葉に、母さんに、オヤジに会いたい。

俺は、泣きながら、知覚していた。ここがどういう世界か、を。死ぬとか、生きるとかなんかではない。《死》の実感なんか得られるはずもなかったのだ。ここも現実世界と同じ、《死んだら本当に死んでしまう世界》なのだから。

そうではなく、ここが異世界であること。会いたい人たちに会えないということ。それが、唯一の《現実^{リアル}》。

泣きながら、ぎり、と拳を握りしめた。現実世界でもこれほど力を入れれば血が出るのだろう。赤のエフェクトフラッシュが手の中で瞬いた。

それを彼らに見せることなく、ドアノブに手を掛けて逃げる様に小屋を出た。

走るのではなく、歩く。ただ、ひたすら。一刻でも早くこの世界から脱出するために。

↳ t o b e c o n t i n u e d ↵

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4673x/>

もしも剣の世界が鉄とオイルの世界なら <SAOif ACシリーズ>

2011年11月17日00時06分発行